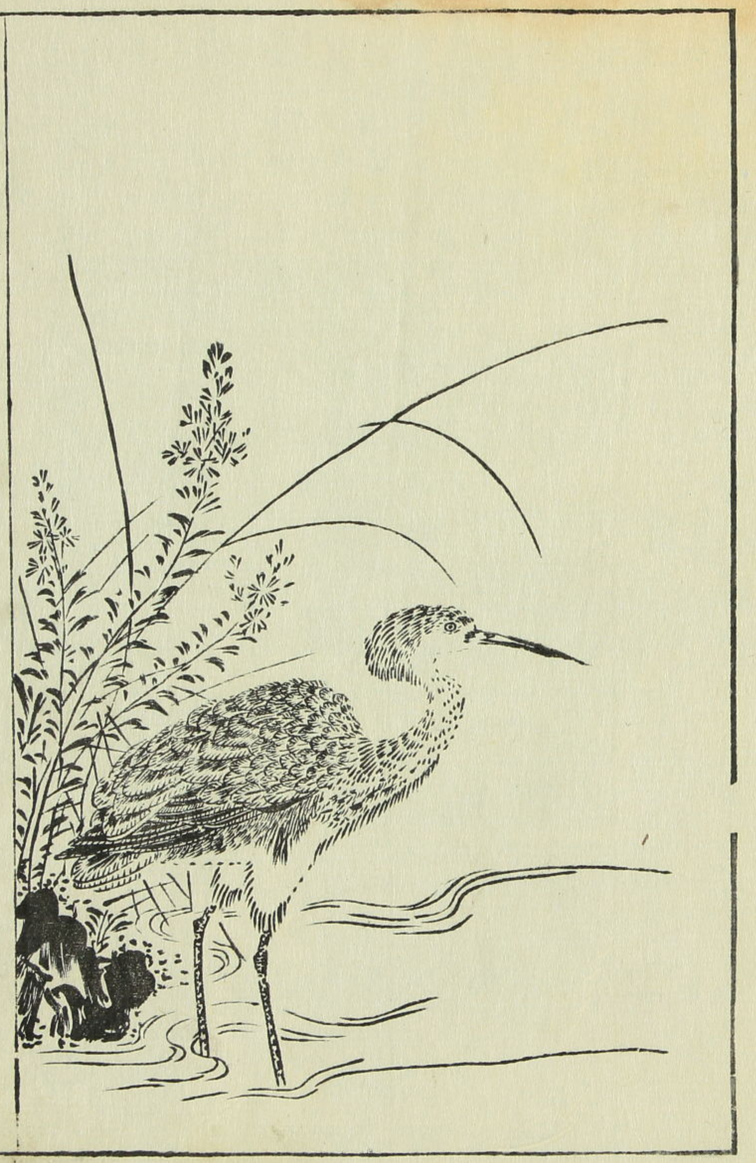
畫圖百花考

二



澤川やゝ汎く沢拾枝

閑幽子

二十一

川魚桔梗

花ちんぜう　分立葉二ぐん　緑青いろ
分立茎の汁ちうう　毛

蒼鷺　鶴鴿

目の四白緑うちごうん　鰓多　ほごうん
立八　葉　茎の長　くわり上ミ　みくら
うすき　白　毛　仕上ニ　背　分ぐ　高さ
あいろ　とあじさゐ　色合よく　考べし
見切　茎の長　高　孔　葉　より少　色
つくら　ぐゐ　背合　ど　のぎう
とみくま　べ　白緑　さの汁　毛
目ろう　腹ごうん　高　毛　ごうん

二十二

物外草

花白　ごうん　ぐ　茎ど　みそ　いづれと
分立葉二ぐん　緑　分立　くま　毛
立茎の汁

野鴈

目の四　ごう　緑ごうん　背　長　茎の長　茎
くら　孔　ども　みの長　すこ　ま　茎
毛立　こ　高　ふ　べ　背中　茎土乃長
茎　ます　て　腹　立　白　鵝の　ぐ
あく　合　ど　ぐ　ぐ　腹白　ごう
うんう　ごうん　毛立　見切　茎　高　毛　立
て

野升草　高多　時丁小　曼羨

下葉先ッ葉切て鴨乃息　來示

二十三

澤潟　慈姑　睦菇　燕尾草

花ごうん中に淡ごうんにてつきと入上に赤うをくべ葉小緑まるけ裏ハ白緑茎の付ケ所茎白緑茎の付ケ

鳧　鴨

目の回朱とみどりごうん嘴黒茎の長さ茎の長上に淡ごうんにてまるしまま嘴口揃ひ黄色ちょっとに小緑まるくべ頬より下あこふ白ごうん也うてこそ下黒の長淡黒くうすくぼうを付せる名付てうすく鳴うをつぼ背黒のくま上にちゃとけ風切尾まで黒淡黒にて黒ごうん先より脇ごうんごうんにてせ〻り刻乃おく〻脇白ごうん脇雌黒ごうんごうんちゃをくべ脇白ごうん

二十四

石斛

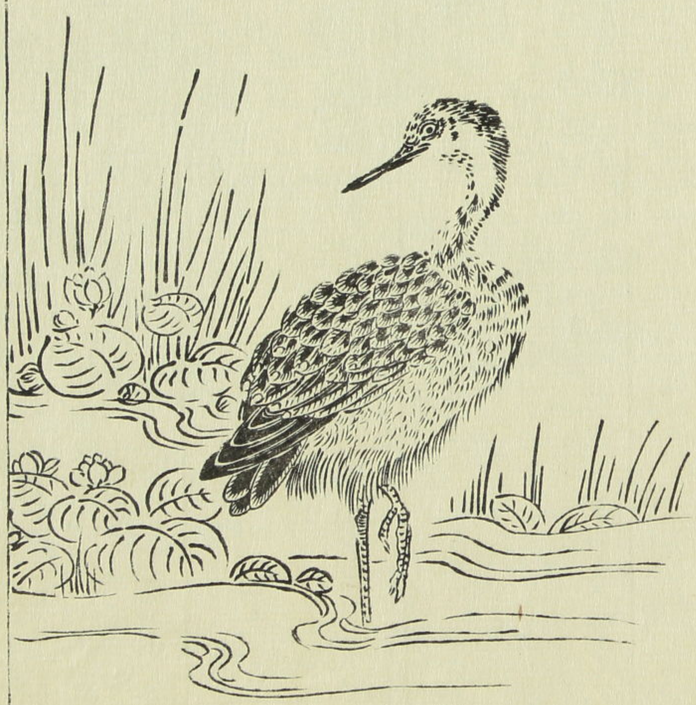
花ごうん下の長上ごうんごうん淡白茎の付てつき茎名付葉緑まを付ケ

鸕鷀　鵜　鳥鬼　水老鴉

目の回茎どみどりごうん嘴黒茎の長さ黒にて先まるしまま嘴口揃ひ黄色ちょっとにかくべ頬より下あこふ白ごうん也翼の下白ごうん紋黒色淡黒にてくまるうあ黒白色ちゃうあごうんうえ突ッ背中より風切尾まで黒淡黒にて黒ごうんちゃとべ〻先黒ごうん脇黒ごうんむしべむ〻ちゃ下緑まで淡黒にてあうひ緑のあうふ緑まをひべ

石觧や物川の色乃拝舟

素尺



小道ゑのみ小金ゑとり住吉

桑田花

二十五

小蓮華（これんげ）

花白しごふんに白絲をかゝくわりとごふんに花の揚より引わけごふんなて茎にとゞくべし白蓮華のごとく位なべし葉絲ゑまのけに茎へべし

鶺鴒（こいさゝき）　文鑑

目の四方茎ゞみ目のうちより嘴つゝみて白き茎あり五ごふんに色黄と足白絲の上流あり足ゑに毛にくり目のまわり朱のさゝうとくゝくべし頭毛くまを出むはえんしゆうり脇すて合ゝとゞごふんに毛朱ゞとて府毛出あり横くゝ法合ゝゝごの府ありごゑけゝき羊文とゞし背中かゝさゝれゝうゑに毛尾の方ハ淡黄ゝうくゝ毛ゞくゝべし毛ものゝえに茎ありごふんに毛風切又尾長の長とみくまを出ゝりごふんに毛尾をうくゝ

二十六

苦薏（くらいさく）

是春菊也莽蒿ノ野菊ニ非ス

又高麗菊トモ云俗名也

花毛ゝうの長ゝとくわり揚ゝりごふんに毛法ごふんにて茎に心白絲わりごふんにてつゝとゝ毛ゝうくろ菊のゝれゞくゝ葉茎ゝゝ小絲ゝゝ付ゝ

鷸鳥（くいな）　水鶏ニ作ハ是ニ非ス

目の四合ゝゝごふんあゝだ下あゝ長の長嘴合茎上先より足ゑに毛肉色あゝゝ毛ゞくゝ頭毛くま朱ゞみうゝとくゝけゝき朱ゞみにて府と出脇長の長背中ゑ一長くまと、合ゝゝどうすくゝ毛風切長くまゝゝりごふんに毛尾をみくま朱ゞみくゝべし

玄葉や問へとも水鶏のかなを

音山

蓮子

二十七

菊

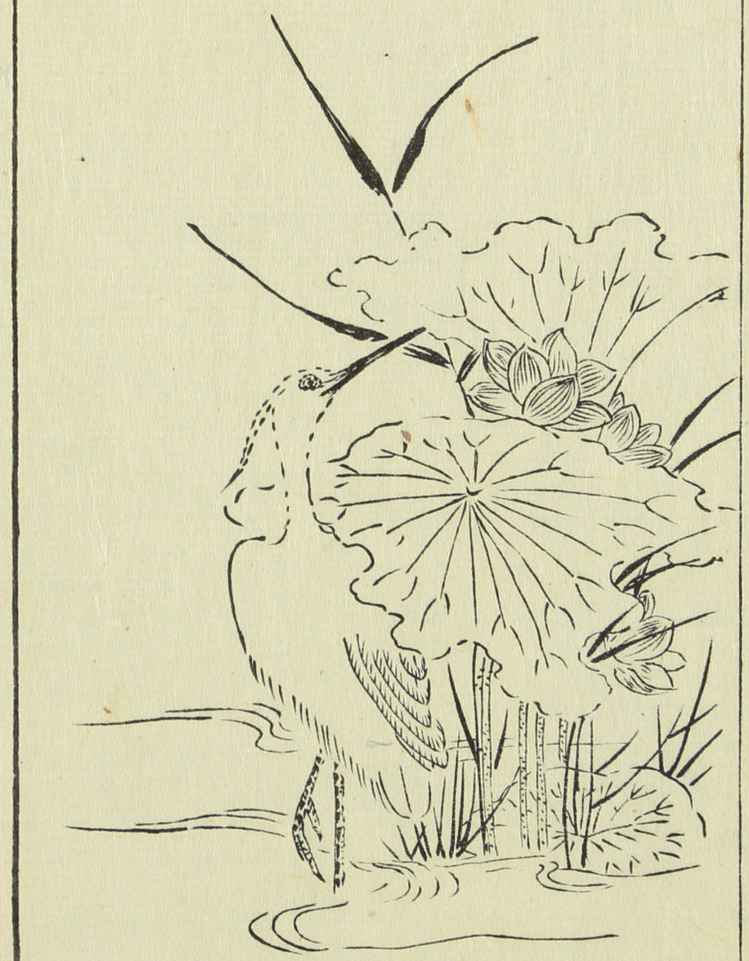
二十八

蓮

芙蓉　菡萏

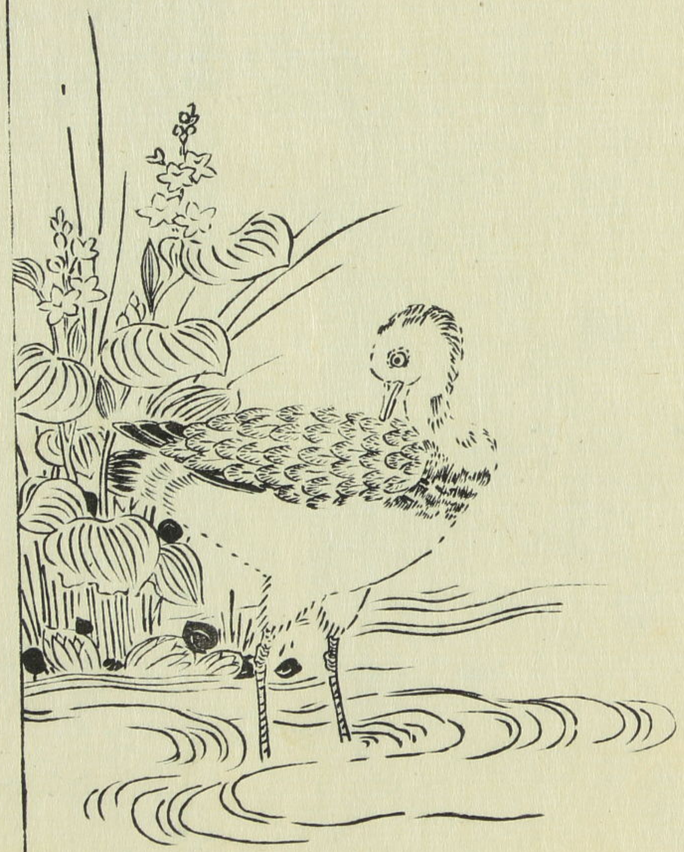
鷺

雉子　夏雑　仝



むかしちりし湾の月光蓮ゆゑ

星花



水葵藻金の池殿しぐり

竜廿

二十九

水蓼

花も花わさびなどよりはやく出て赤く小緑まめなるまめのけしきにて花少なくてうつくしく入るべし

水札

皮肉色ゆり葉のきわにそなわり花の色ゆりに似たりうつくしく入るべし

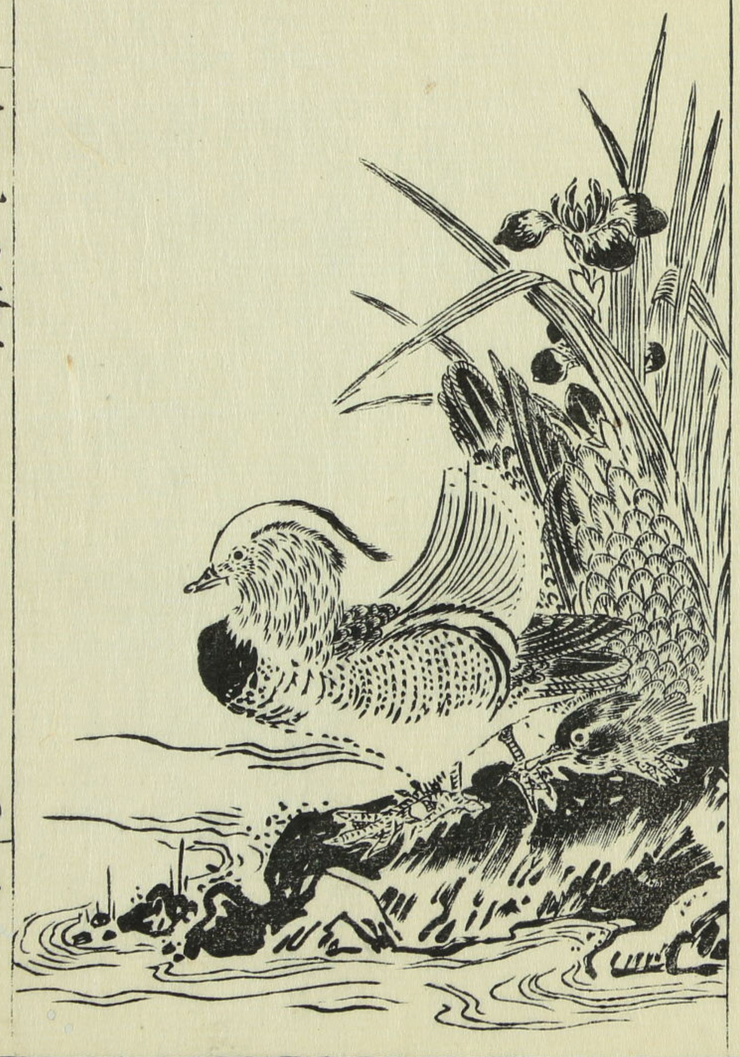
三十

白昌　菖蒲　蘭蓀　白黒二色

花芯より法あさく細糸青二通もつべし

鴛鴦　雄ヲ鴛ト云　雌ヲ鴛ト云

背皮肉色ちがひ羽白し法黒にて毛出ひとり脇すぢ黒の具法とみ仕上ちがひあいせ羽より紙後すぢ合ちがひ背中すぢ黒の具うす黒仕上肌切尾すぢみな黒の具とみ仕上ぼけすぢ羽も地合黒仕上ちがひてくち嘴もとはわりべにすぢ後ちがひ羽色ちがひ入雌合ちがひ背中黒仕上ぼけ黒の具合黒仕上ぼけすぢ毛出黒皮肉黒に黒の具とみ仕上足雄のごとくに用のちがひ紙黒多しかるべし



園の花ちかやゆるゆるかー行安き

三鳳

川骨やうんのゆうを枕とて

千盛

三十一

萍蓬草　川骨　俗字

花ちいさくこがねの色なり葉も又合葉にて葉差しくらん緑なるめり茎の汁は節ちくらん

小茎ち入花付ちくり

鸕渠　水鶏

背もと赤く先黒しかも地肉色なり茎ま先より黒くなりて毛ま目の四方どみ

ちごふん足部より下まれ汁茎ちち

上名下の異名ばかりそ仕上

地身黒汁異名ばかり黒毛色なり

三十二

南京梅

花ちいさくこがねの色四一元名下力異名下ばかりそ名ちつがミちくくの異うてる

茎ち汁

南京蓮

背黒くこがねの色の四茎どみ地身

白緑の異ちくなり茎汁元ちくよ

ま名下ばかり海ちく入べ一月のまいりちさ

脚ちれ色ちくを名下ばかり海名下元

ばちくべ

風切羽黒の異ち　みくま尾ごふんぬり

ごふん元ち

昆

梅、腥、南—京皿

季

鷹、化、南—京操り

巫峽

巨峽

鷄や九曜と蓋如食蓋も

德雅

三十三

金盞花

花合黄土の具にて付る花乃殆ん
ど朱をうくべし葉緑を付る黄を乃
汁絞りさ
めの黄を入るまの汁にて

雛

雛

目の回朱ぐみ嘴長く黄の具に合黄
土うけとさろ花肉色朱にてぬりとる
くり黄身白しこうん付る毛をつけの
おく〳〵
雌ごうん付る朱ぐみうき入府蔓のごく
手を付けを保と来やすく
雛せなの部ともれとみる肉上に朱黄を
うけ後ごうん毛を付し
黄に付る一流あり多まごうてのち
白ふ日黄ちり

三十四

南燭

蘭天竹

花ごうん付る葉緑をあり黄の汁
くまを加へ木黄ぐみ黄をとり〳〵

鸚鵡

背黄黄こ目の回朱ぐみ黄多くとずこ
黄付る多りよりせなりひとくもたあいろう
うすくわいせこうんうて白入毛みを見切すと
法つけれぐ〳〵ト後ごうんうす黄府尾脇
乃ぐ〳〵皆黄付る

もゝとやを入相天木山　尺志

みちのくの青柳の糸をもて
あまのつりなわをうけるうん

乘三

三十五

志ゐかり

花茎どみ付き茎茎のけけ葉ニぐん
緑まち付き茎まれ汁そうろう魚をぢろき
もべし

刀鴨（たろべ）　勛 全　鴨 全

嘴長茎仕立目の四茎どみ赤ちごろん
形より形ろ形ろまで茎く魚上ニ志ゐどき
うけ風切茎仕立二すれ茎の上緑まち掛
茎ごうんひより股合黄土茎赤ちと比く
府毛ろき編ろろより尾まで茎く魚上ニ
茎どみろべ地枠ごうん立入とべし

三十六

蒭春羅（ぐひ）　鴈皮

花茎地肉色光明黄仕立毛ろ下ろて
ろろひを入ぐし
葉緑ろ茎茎の汁ろう魚緑ろ
茎白緑いづれも付き

千鳥（ちどり）　鴫

嘴長肉色上茎仕立て立乾し
形より背中尾まで茎ろまと上ニ茎の汁
ろろくくし風切茎仕立て地枠毛ろき
法茎れ汁股こうんく魚こうんけて毛立
とべし

隅田川の浦の夕　惠風

一八や後ハて八消るかい行方　逸志

三十七

戈鳥尾

紫羅傘

花わさだわり紺青にてづき物ごろんにて
うさ入中の筋こきすうの白をへべ
葉編まで まろけ 成筋也

鵠

鵠 鵝

月の四月ごみちごろん黄とみる其熱
身もとこ成上ちゐどみりけト後ごろん
こ成筋也 日

三十八

蘭麹草

佛耳草

花ちこの其付立葉編まで付立苔
ろ付こ成筋也其後

鷗

紅鷗

嘴足赤し肉色ゆろ朱こ成月の四ごろ
熱身うす黒こ成黒毛ごきみごろん
毛うきを八
頬ふくらト後月初羽指ゆ山分白
ごろん仕立法ごろんて毛を足合
もべ

鼠麹黄蒿開岸頭春江漾漾了閑鷗
不如人世浮沉支隨浪任風自在流

釋亮秀

百花鳥譜卷三

百花やうこん柳のあそいと

石中子 琿文

三十九

金絲桃

花葉共に黄色にして葉の葉より長くごうんとして光あり夏の旬を付て二節なり金糸のごとく咲いとあり花泥にて染て葉にも花にもたべ

鶺鴒 田鳥 鴫 俗作

背黄色の羽に白黒斑ありくまでうしろ白黒斑の羽の上に黄色どりけむあくまでうしろ白黒斑下後ごうん毛出る胸腹黄色にて腹黄ずとうけ而くあいろにてそうちゆいをへべ一尾白線の羽長く腹上に黄の汁をくる

四十

梅 楳 樹

白くして地白線の羽うすあるうて上ごうんく腹黄色にて黄八合泥紅い朱どみ黄いごうんたうちもくもの羽うて白と付うてあいづれも朱色をみ木うちう羽に腹の上にあいろくうすくくべし大和ちう仕立て地木の羽ちう上羽にうすくくまと木の羽に白線付羽にお羽をへ木にて用のくあり又黄の汁をかける

鶯 黄鸝 倉庚 黄栗留 春鳥

背羽に黄色にて目の回り黄朱どみかしらより背中うす羽に腹上に黄の汁をくる尾羽白とみ腹ごうんくまるにてくねいのトかちくうのきあひに腹をとるべ

雷堂　百里

四十かゝ丸こけゆゝせ湖白山

音山

四十一

茶樹

茗 夫須加セツリヒニ 槫藪莽

葉白く枝こまりごろんにて住ところどころ
ところどころの白と入枝のまぐさ
けて付葉柳ちる柳ちるうちに成るまの
うて低く雪隠ちる雪白てだごろんすく
ちるもちけちべし

四十崔 鵲

嘴はしの長く脚はしろうす黒毛ちべし
風切羽の長くみ住ところどころんく成背中
うすあさぐろの長めうちうす黒く成毛ちあい
ろくにてえごろんにて出入ちべし
又巻にい岩中うす黒ろ成上ちうすれあい
ろくけちめちうしも出あろくごろん出
入ちべし

四十二

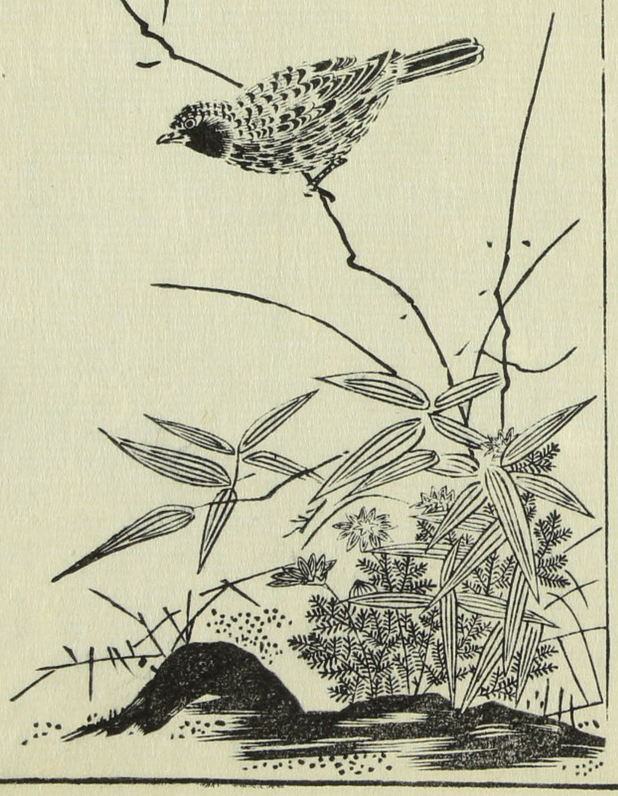
福寿草

福寿草 ちくじのさう

葉ちて茎ちてきくに仰ちうちちの長柄より
茎のけりて茎ちちちにて中ちりあい茎出
ちべし葉菊ちに仰て仰ちに長ちさまち二
ちんをちべし茎のけちるもちん合

ちんぐ鳥

菊長はしちうちと上ちあすいをちくうちも
脚長にて風切長く成ちちごろんく成うて尾
ちべく数多長ちうちと上ちあちべんうすちく
べれがいの角ちうすあさぐろのさあひくまと
へあいろちもちちべし



胞ちちと羽ちはけちちも福寿草 鮮〻

春や祇の出風石鹸吹　素丸

四十三

瞿麥　午麥 全

花ハ地ちゝう上朱ひてせんりわり分でし
ぎゝくろ陸あり茎の汁上ニ色ハ紅ら陸く
へ一紫緒ちゝうく陸茎出いづれも陸出
茎ろけく

風鳥

嘴長くして黒ひすり脇までとゝみ陸
長毛出頭ちゝうの長背中翅長ら陸上ニ
朱ぢみけ尾りてちゝうの長うて毛出
しやすくして人を泥出入ハ丸丸合恋祥毛出
朱長うてもべー
長ちたうて茎に手ひどくいづも古人
の長粗ちゝうり又茎附ろう人まれなり
いづも画ぬのうちむ茎長うれいだう紀
ーぬ

四十四

檀持

花ハ地ちゝう上朱ひてせんりわり分でし
ぎゝくろ陸あり茎の汁上ニ色ハ紅ら陸く
へ一紫緒ちゝうく陸茎出いづれも陸出
茎ろけく

鶉

目の内朱ちゝうみちゝうん嘴長ひて脇頬
ちゝうけ恋祥長ら陸上ニ朱ぢみけ毛
出時朱ぢんひてう一尾付ぎハ白ーこ
うんひて出べー羽風切長仕立二年羽朱ぢ
みけちゝうんこうんちゝ合こうんちわひ
へぢー

咲やこのうらうらうハ本陳五堀

東正

今朝ハ鶯の出るうぐいすとのゑ

七才 吉五郎

四十五

杏子（あんず）一名 酣梅

花も地名々の異志中に多くは俗名多くて
呼ちがへごろんなりて志べし志ゝの異りて白ひを
突べし是茶どみ全体うと紅梅に似り
併西茶ふも勢色ふも各別分る所あり
宇紙付るべし

鵲（しめ）

背は青黑の斑上に合英出るけ是日〳〵日はうち
うと多くはふちごろんなりてかゝら脊中に合英
出毛出茶とみと名る是り是の異うとく前
色いて羽風切は佳色ふちごろんうけ二色
羽は青黑の斑の上に多くはうすくうけ者ごろんに
てくらはうう毛出ごろんなり

四十六

紫苑（しをん）

花白しごろんなり仕立は白絹茶の汁仕立
染絹まゝ俗名ちいづれもくされ汁下茶
猪木下地合まくごうすれば俗名すり
くま絹出名々一流は合英出の上茶にて
仕立るあり絹の糸のゝ多くは仕立に八
出を

鶫（ゐど）又 伯趙

背は青黑まで茶どみ脇合まくど
背中は青黑に異くまくわり是毛りきとべ
風切は佳色尾は日〳〵日の四茶ずゝ

鶫 ゐど 老はめるとや 梅の事

玩堂 梅宇

月日星移りゆく柳帰抑　連子

四十七

柳　楊

紫二ぐん緑色歳ハ小緑付き白緑しそ
さへうべし本色うちう上たうと赤ろ汁
うべし

三光

常見色ぢろひまで淡色にて赤び
背中色ろ成うとくうて上三せろ名ぢを
ろけ風切色仕立尾淡色うて出上三細こん
ぢうをうべしト後印くこうんくまでうん毛
うさなり

四十八

蒸世伊登宇

花下地あさ花めり名ぢ成上三こんぢうけ
相のむろ仕立けぢくとべし紫緑色ろうく
ま多ろき茶の汁本朱どみうこふ

き稲ちみ

常見色ぢより背中まぢうとあさ花ぢり
めいろうけてもうき風切色仕立二色ねうす
色ろ成尾あさ花ぢ山ひより腹まぢ印ぢこうん
くまぢうんもうきト腹尻まぢ合ううぢ朱
ぢみうてもうれとべし

うぐいす　海市

ゆふかぜ　恵風

四十九

紅梅

八重咲の中に緑をまじえて三つ宇を入れ花弁も他多くの咲中より多く少し小一寸多く中より円のむ張りごうんつまりて紅色べーちべごうんせん白いさもうもうの咲すべて付べーつがいと多くの上光沢朱の上沈を蔵くうべーしてかの朱ぞみして実べー本ともりおよ毒く花を賜ふ

鴻鵠

背足共に赤ー肉色上茶多くうさ紅目足にて付から白ごうんつま毛ごうんつま地分黒く足を仕立て股い背中ーりかくく仕立べー

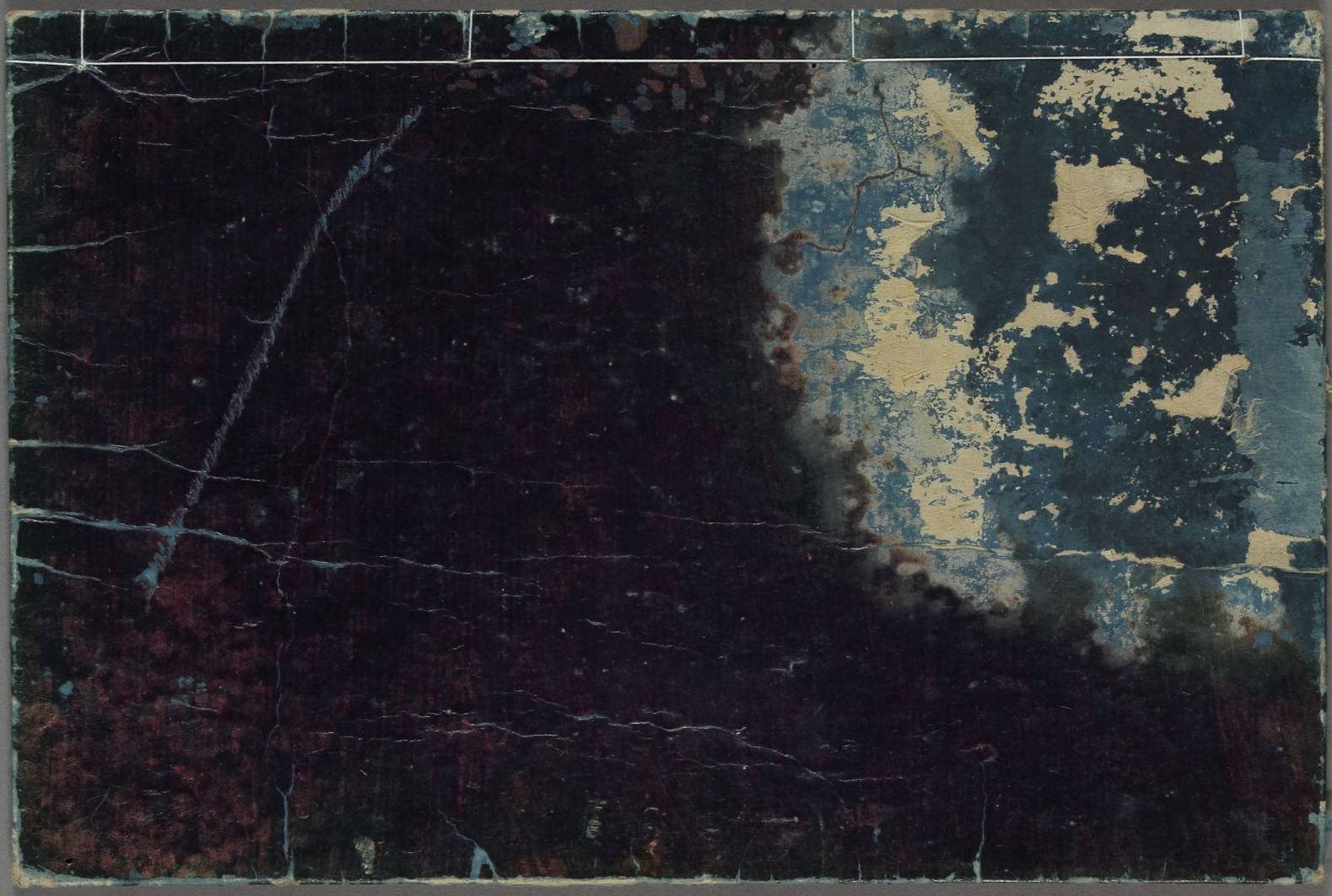
五十

虎杖

花ごうんにて付立朱ぞみして実入ぞべ葉も他合ようど朱の上すこうく底にり付朱して筋立ちべー

あぎ花

背足共合黄土朱ぞみつり脇より背中黒くま上に朱ぞみつけ毛立府るの巴ぱ朱ぞみよート後ごうんつま目ーく毛立脇ドり尾まで合黄土朱ぞと足して府を入目毛立ちべー

足て紅ん虎杖わぎて沢乃鵐

曼羨